

# かわかみ通信 むすび

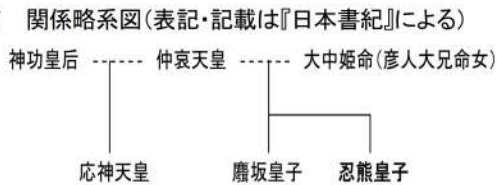
2020年9月  
長月号

さて、新型コロナの感染が少し落ち着いてきたのかな、と思われた今日この頃。以前より待望久しい越前二の宮「劔（つるぎ）神社」に参拝してきました。

体がなまっているのか、車から降りようとした途端に腰痛発生。現在も長く座っていて、立つ時に少々痛みを感じます。参拝を延ばしていたためバチがあたったのでしょうか？

改めて劔神社の成り立ちを由緒書に沿って確認をします。主祭神は素盞鳴尊（すさのおのみこと）、氣比大神、忍熊王（おしくまのみこ）です。本誌Vol. 39、Vol. 40で書いたことを簡単にまとめます。

忍熊王は応神天皇の異母兄に当たります。応神の母である神功皇后が新羅遠征から帰った時におそらく皇位継承をめぐるかと思いますが、忍熊王と神功皇后が戦います。一説には忍熊王は戦いに敗れて琵琶湖に入水されたという話もあり、別説には由緒に示されているように越前に逃れて梅浦に着いた。その時、民人が賊に苦しめられていることを哀れみ、賊討伐にたちあがったが悪戦苦闘。しかし、霊夢に現れた素盞鳴神から神劔を授けられて無事賊を



退治し平定することができた。そのため王はこの神劔

を祀ったのが劔神社の始まりとされている。王が薨去されたとき、応神天皇がその徳をしのび、劔神社に父王（仲哀天皇）とともに合祀したとされている。

この二つの説には違いがありすぎます。後の節は上手くできすぎた話のように思えます。二つの説をまとめるとどうなるのでしょうか？ 誉田別命（応神）は武内宿禰とともに氣比神宮に参拝したのは神功皇后摂政13年であり、忍熊王との戦いに勝利した後です。参拝した目的は確か「みそぎ」であったと書かれていたのを記憶しています。この時の夢は御名易（みなかえ）神事として今に伝えられています。この「みそぎ」というと何か悪いことをしたのかと思ってしまいます。兄に対し手をかけたのですから。

そこで、思い出されるのが「御霊信仰」です。菅原道真公を祀る天満神社が代表です。京都には「御霊神社」もあります。これら全てが、その人をいじめた「たたり」と思われる出来事が多く起こったために、その御霊を鎮める目的で、その人を神として祀り、伝えられたものです。即ち、劔神社は実は御霊信仰によって作られた神社の始まりではないかというのが私の考えです。

もう一つはVol. 40にも少し書きましたが、神功—応神の時代、日本海側にはその勢力に対する政治的意味合いもあったのではないかと考えています。

川上医院 院長 川上 究

## 織田一族発祥の地



越前町織田地区にある信長公像

越前町織田は、織田信長公の祖先の地です。織田氏は織田荘の荘官として、また越前国二の宮劔神社の神官として代々劔大神に仕えてきた由緒ある家柄でした。

応永年間（1394～1427）に神官の子に「常昌」という立派な人物がいましたが、時の越前守護斯波氏にその才能を見出され、家臣として取り立てられて、尾張国に派遣されました。苗字は故郷の地名をとって織田を名乗るようになりました。

信長公は戦国の乱世にあっても、劔神社を氏神として深く尊崇し、武運を祈るとともに、多くの神領を寄進し社殿を造立するなど、劔神社の保護と領内の治安に尽くしています。

織田氏の家紋が「織田木瓜紋（五つ木瓜紋）」で劔神社の神紋と同じ紋章であるのは、劔神社と織田家の深いつながりを示しています。

## 初期神宮寺と神仏習合

福井県は神仏習合が進んだ地で、初期の神宮寺が創建されたことで知られる。一般的に神社の境内に建てられた寺院が神宮寺で、その存在が神仏習合の証ともいえる。神仏習合とは神も仏も同じものとして、神祇信仰と仏教を調和させようとする考えである。

日本では奈良時代から神と仏は一心同体と考えられ、神仏の融合調和がはかられた。奈良時代ごろから全国に神仏習合思想が波及し、平安時代には種々の神と仏とを結びつける本地垂迹（ほんちすいじゃく）が説かれ、神社にも仏像を安置するようになった。

初期神宮寺のうち最古級とされるのが、越前国の氣比神宮寺と若狭国の若狭比古神願寺である。

両寺の縁起に共通するのは、神が苦悩して仏に救いを求める、いわゆる神身離脱の内容である。神が仏に帰依するのは奇妙に思えるが、8世紀成立の神宮寺縁起に共通し、初期の神仏習合に見られる現象である。両寺の事例は710年代後半にあたり、ほかの地域神に先駆け、8世紀前半の段階で仏教と神祇信仰との接触がおこなわれた点で注目できる。[織田文化歴史館の説明文より抜粋]



